KADAIGEST 12

KAGAWA UNIVERSITY

カダイジェスト 2017年12月号

学長閑話

香川大学長　筧 善行

先月号の「学長閑話」では米国のサンフランシスコに拠点を置くミネルバ大学について少し触れた。今回はその続きを書かせていただく。

東京大学の堀井秀之教授らが率いられるイノベーションの学校「i.school」が、香川県内の高校生を集めて東京大学イノベーションサマースクールを本年8月に小豆島で開講した。その際にファシリテーターとして参加した外国人学生の中に、ミネルバ大学の学生が参加していた。2014年に開校したばかりの大学だが、すでに世界各国から注目を集め、合格率は2%前後という狭き門でハーバード大学以上の難関になっているとのこと。米国の大学ではあるものの留学生の比率が75%と大変高く、私が小豆島で遭遇した学生も一人はインド出身、もう一人は韓国出身だった。自信に満ち溢れて、香川県の高校生とのグループ討論をリードする彼らの姿が印象的であった。

ミネルバ大学はキャンパスを保有しておらず、授業はすべてon line とフィールドワーク型のようである。学生は4年間で世界7都市（アジアではソウルと台北、残念ながら日本の都市は入っていない）を渡り歩いて各都市に所在する大学寮で共同生活を送っている。学費の安さは際立っており、米国の大学生の学費の平均の4分の1程度で、学生の必要度に応じた奨学金制度も導入しているため、世界中から学生が集まって来ているようだ。

なぜ、このようなユニークな大学が誕生し、世界中から注目を集めているのか。背景には我々の社会や生活環境が高度にIT化し、人工知能の導入などで目まぐるしい速度で変化が起こっている一方で、教育の進化がついていけていない現状があるのではないだろうか。ミネルバ大学の校訓は“Sapientia Critica (批判的知恵)”。上書きされる一時的な「知識」ではなく「知恵」と学び続ける「好奇心」を何よりも重要視しているようだ。入学試験は独自の設問集を用いて施行されているそうだが、TOEFL や SAT などの外部試験を一切受け付けていない。料金を払えば何回も再トライが出来て高得点を取れるテストは裕福な家庭の子息に有利になるからだとのことで、我が国の入試改革とはコンセプトが根本的に違うことに愕然とさせられてしまう。

香大サークル紹介

アイスホッケー部

アイスホッケー部は、中四国大学内でもほとんどが大学から始めた人ばかりで、チーム内、他大学とで切磋琢磨しながら、技術的にも精神的にも成長できる部活動です。新歓期には、体験ホッケーも行っています。

■活動場所:トレスタ白山アイスアリーナ(三木町)・香川大学体育館

ユースホステルサークル

部員全員で、または少人数の班に分かれて旅行を楽しむサークルです。毎週金曜日に例会を開き、班活(旅行)の計画やイベントの企画・告知を行います。様々なところへ旅行に行き、綺麗な景色や体験を通して仲間との絆を深めましょう！旅行好きの集まりなので、自分の行きたいところに皆を誘って気軽に行けますよ！

■活動場所：経済学部棟

医学部アカペラサークル S-po

私たちは、声だけで曲を歌うアカペラを行なっています。部員は皆、歌うことが大好きです。部内で行うライブ以外にも、色々なイベントで歌わせていただく機会もあり、発表に向けて、楽しく、真剣に練習しています。部員は皆、学年を問わず、とても仲良しです。歌うことが好きな方は是非一度ライブを見にきて下さい！

■活動場所：医学部会館防音室

香大トピックス

「人生100年時代を、私はどう生きるか？」長寿医療を考える特別セミナーを開催

12月10日、本学幸町キャンパスオリーブスクエア多目的ホールで、日本を代表する癌研究者であり、国立がん研究センター名誉総長、公益財団法人日本対がん協会会長の垣添忠生先生を講師にお迎えして「人生100年時代を、私はどう生きるか？」というテーマで、長寿医療を考える特別セミナーを開催しました。

伸び続ける平均寿命の中で、我々はどのように生きるべきかをご自身の体験も含め示唆していただきました。また、最愛の奥様を、がんで失われた喪失感から立ち直るきっかけを与えてくれた四国遍路、居合の修練や登山についてもお話をいただきました。

教職員・在学生を始め、県内の医療関係者も多数参加され、実りのあるセミナーになりました。

■垣添先生のご紹介

垣添先生は東京大学医学部をご卒業後、泌尿器科学を専門とされ、数々の業績を上げて来られました。国立がんセンター中央病院長、国立がんセンター総長などを歴任され、我が国のがん診療の発展に大きな貢献をされました。現在は、日本対がん協会会長を務められ、がん検診の普及啓発活動をされるかたわら、居合の修練、さらには四国へ度々お越しになり、歩き遍路をされています。

高松グリーンロータリークラブの25周年記念事業として法学部と連携した「命の授業」が行われました

11月28日、法学部平野美紀教授の授業の一環として、大谷貴子さん(約30年前に白血病に罹患し、骨髄移植を受けられ完治された方)による「命の授業」が行われました。これは、高松グリーンロータリークラブの25周年記念事業の一つとして、香川大学法学部と連携して開催されたものです。

白血病と診断され助かる見込みがほとんどないとわかった時の衝撃、骨髄移植を受けられる仕組みもなかった当時、今の厚労省に行かれたり署名活動をされたこと、ご家族の中の葛藤など、心に染み入るお話を、ユーモアたっぷりにエネルギッシュに語ってくださいました。

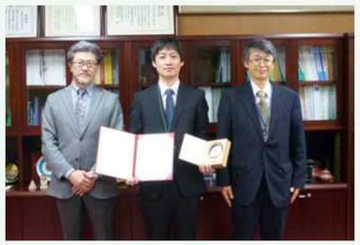
また、骨髄移植で救われた患者さんのご家族からのThank you letterの紹介、治療を受ける前に精子や卵子を保存できたことで子供を授かった方々や、香川県で初めての骨髄ドナーとなられた県立三本松高校の三好輝徳先生からもお話しいただきました。

骨髄移植のことを初めて知った学生も多かったようで、人のために何かをすることについて真剣に考えつつ、ドナーの権利を守る仕組みなど法的視点も学びながら、笑いあり涙ありの90分を、真剣に聴き入っていました。

森裕助教授がマツダ研究助成奨励賞を受賞しました

工学部電子・情報工学科の森裕助教授が、公益財団法人マツダ財団の第33回(2017年度)研究助成〈科学技術振興関係〉に採択され、さらにマツダ研究助成奨励賞も受賞。

受賞対象となった研究題目は「低コヒーレンスディジタルホログラフィを用いたマルチカラー3次元形状計測機構に関する研究」です。この研究は、光を利用した非接触な物体形状計測技術である低コヒーレンスディジタルホログラフィを基盤として、そこから複数の波長情報を用いることによって、物体の形状・質感・色調など、より多くの情報を一度に計測できる技術の実現を目指します。さまざまな物体情報を一度に記録できることによって、特に工業分野において製品の企画・設計段階から製作・検査に至るまで一貫して対応できる評価・計測手法を実現します。



讃岐弁講座　いんでくる

香川県の高松市及び東讃地域などでは「いったん家に帰ってから、またその場へ戻ってくる」という意味で使われていますが、観音寺市など西讃地域などでは単に「家に帰る」という意味で使われています。
香川県は全国で一番小さな県ですが同じ方言でも東と西ではこんなに意味が違います。 東讃地域に住む方と西讃地域に住む方が会話したら、その意味の違いに少し驚かれるかもしれませんね。

発行：香川大学広報室
soumkot@jim.ao.kagawa-u.ac.jp

香川大学ホームページ
http://www.kagawa-u.ac.jp/